

最優秀賞「たまゆら湾」

江口ちかる

主人公明が住む町三石
明の家は食堂を営んでいた

たいかれんが

耐火煉瓦の町・三石〔備前市〕

のだにむら

和気郡野谷村（備前市三石）の名主であった加藤忍九郎は、明治初期、小学校で筆記用に使用される石筆に三石台山のロウ石が適していることを発見、日本で最初に国産化を成し遂げて大成功を収めた。しかし、石筆は最上級のロウ石しか使用できず、大量の屑石が発生し、その利用方法が課題であった。やがて忍九郎は三石ロウ石が耐火煉瓦原料として最適との情報を得て、耐火煉瓦の製造研究に着手。明治19年(1886)頃に試作に成功した。そして同23年に三石耐火煉瓦製造所を設立し、耐火煉瓦の製造を開始する。

にんくろう

備前地区の耐火煉瓦の発展は大正時代の第一次世界大戦による増産で、三石に多くの新会社が設立され、生産量が急増し、大正末には日本一の生産量となった。

『岡山・備前・玉野の歴史』郷土出版社より

三石は山間いの町だった。
くねくねとのびる国道二号線
と、その両脇に続く暗い緑の
山々。
低くつらなる山の姿を大人たち
は仏さまの寝姿になぞらえた。
道沿いの家々やその奥に点在
する家。そのなかから煉瓦の
煙突がにゅつとのびている。



備前市三石の町並み

明が想いを寄せる美耶子が語る
三石明神社と石のヒミツ

みついしみょうじんじゃ

三石明神社

はらみいし

三石神社は三石明神又は孕岩神社とも呼ばれる。その昔、神功皇后が懐妊の身で当地にお立ち寄りになった際、この社にある大きな岩の上で休息し、それ以来境内の岩や石は皆白い小石を孕んでいるようになったと伝えられている。子宝、安産祈願で訪れる人も多い。

参考：現地説明看板

貸本屋「たまゆら堂」の美耶子に聞
く土地の伝説は素直に耳に沁みた
。「小さい頃から石が好きなの。
。：その神社の境内に海
石、山石、川石があるんで
すって。：」 「そういえば
たまゆらというのも石に関連
があるのよ」
本棚の一部にはいろいろな石が置か
れていたが、ある日、見覚えのない
石が置かれていた。それは三石明神
社の孕岩だという噂がたつた。



三石明神社の本殿
周囲には大小さまざまな岩がある



境内にある孕岩

主人公チエが住んでいた町
英夫兄弟と水遊びをした

旧七軒町 [現、岡山市北区南中央町・京町]

「今、うちらがつかつとるこの丸い池、昔はお殿様が食べるの魚の生け簀じゃったんべりゃって。」
「生け簀で俺らは泳いどったんか。なんかもおもしろいな」

岡山市内を流れる西川沿いにある町。寛永9年(1632)の池田光政の入封以前からこの辺りに武家屋敷が7軒あったので、七軒町といわれた。慶安期には城下町建設のために瓦を納入する瓦師が住んでいたようだが、のちに武家地となった。その頃の城下図には「十二ノ橋・御いけす」とある。橋の東詰めに「旧七軒町」の地名由来碑が立てられている。

参考：『絵図で歩く岡山城下町』吉備人出版



七軒町跡の地名由来碑

2021年6月撮影

チエと英夫兄弟とが往来
した思い出の岡山駅

戦前の岡山駅



(Ookyama) The Street of Okayama Station

り通前驛山岡(所名山岡)

岡山県郷土文化財団所蔵

岡山駅は明治24年(1891)の山陽鉄道の開通とともに開業。当時は木造であった。関東大震災からの教訓を得て、大正15年(1926)11月に鉄筋コンクリート造の駅舎が完成。昭和47年の新幹線開業で、3代目となる現在の駅舎となった。

子どもの頃、英夫たち兄弟は町への、チエには山間の村への楽しい冒険の入口だった駅。戦時中は暗くて悲しみのいっぱいだった建物に思われ。そして敗戦の惨めさをいやという程思い知らされた駅。...

翌日の夕刻、チエは急いで岡山駅に駆けつけた。駅の堂々とした四角い建物の正面には丸く大きな時計がはめ込まれ、いつもどおりに時を刻んでいる。

主人公信子も動員された軍需工場

岡山県の軍需工場

勤労働員

信子三舞子、三舞子の父は、倉敷の被服工場の勤労働員として働いていた。昭和18年(1943)9月22日、「女子勤労働員促進要領」が定められ、未婚女子を勤労働員に組み入れることが決定された。本県では、14歳以上の未婚女子を地域単位に、女子学生の卒業予定者をもって学校単位に女子勤労働挺身隊を結成し、航空機、造船、繊維などの軍需工場へ出勤させた。

戦争の激化とともに国内の態勢強化が行われた。昭和18年(1943)9月22日、「女子勤労働員促進要領」が定められ、未婚女子を勤労働員に組み入れることが決定された。本県では、14歳以上の未婚女子を地域単位に、女子学生の卒業予定者をもって学校単位に女子勤労働挺身隊を結成し、航空機、造船、繊維などの軍需工場へ出勤させた。

『戦後50周年記念援護の歩み』岡山県より

この物語の主人公は、倉敷市の大阪陸軍被服支廠倉敷出張所に動員されたようである。

赤い糸で結ばれていた男性の親戚

きぐちこへい こへいえん

木口小平・小平園 [高梁市]

「お家は成羽でな。しつとる？なりわ。備中神楽の発祥の地。弁柄の産地。それにかの有名な木口小平の出身地でな、覚えとる？修身の教科書にのつとった」
「はあ」
「確か挿絵は戦場の光景だった。……次の頁は隣の家の障子を破ったことを素直に謝る少年の話で、なんとなく、右ページの戦場の絵の砲弾が、左ページの家の障子を破ったように見えて、面白かったのを覚えている。」
「実はこの人、ご親戚にあたるんじゃないかと。信子さん。どうかしら？」



小平園



小平園に立つ顕彰碑

大正から昭和初期のころより文部省低年修身の教本に載せられた木口小平は明治5年成羽町新山に生まれました。明治25年広島歩兵連隊に入営。ラッパ手として修練をかさねました。明治27年日清戦争勃発。小平の最期をとげた成歓の戦いの記録には「ラッパ手木口小平は胸部に敵弾をうけ一度は倒れましたが銃を杖に起き上がりさらにラッパを口にあて突撃の譜を奏し息の絶える迄これ続け、絶命後も尚銃とラッパを手から離さず、その壮烈なる動作は大いに我軍の士気を鼓舞した。時に明治27年7月29日」と記されている。大正3年川上郡内諸団体の協力にて小平園を建設。永く後世に語り継いでいる。

現地説明看板より

写真提供 高梁市教育委員会